

山里の秋は短かくて冬支度

里草会顧問 福井正樹

秋の農繁期は稲刈りから始まり、学校も休みになるが、田植えの時よりは少ない。それに雨が降ると稲刈りはできないので登校せねばならない。山陰は雨が多いので、しばしば中断していると休みの日が少なくなることもあった。子供には稲を刈る仕事はさせなかった。一握りが二つで稲一束になるのだが、手が小さい。穂を上手に刈り揃えるには技術がいるし、落穂を作ってはいけない。稲刈りで子供の主な役割は、大人たちが刈って束ねた稲を、荷車の所まで運ぶことだ。

山田はこの距離が長いので、背負って細い畦道を歩くことになる。それを積んだ荷車を押し家の近くの稲木に掛けるのだが、車を押したり引いたりせねばならない。稲木に掛ける時稲束を一つ一つ渡すのも子供の役割だ。田の傍まで荷車の通る道があれば、かっいで運ぶ。首にタオルなどを巻いても、藁で擦れるので赤くはれてくる。風呂に入ると浸みて痛い。それでも秋の取入れは春の田植ほど辛くはなかった。

日が短いからだろうか？ 刈り終わった田を鋤で畝立てをし、麦を蒔くのは大人がする。ナタネを定植するのは手伝わされたが、絶対量が少ない。山田や湿田には作付けしないし、大人について働いていれば、作業の都合で大人も手が空けば片付けてくれる。それにカキやクリが稔って来るだけでなく、サツマイモを掘ったり、田の畔の大豆や小豆も収穫する。山田の畦のカキは、枝を揺すって刈り取った田に落とし、夜なべで皮を剥き串柿にする。そのすだれが軒下に長々とつりさげられてゆく。新米を炊いて食べる日もある。一つ一つの仕事が、豊かな収穫につながり何となく心も満たされてくる。

そして冬支度、稲を完全に脱穀しないうちに初雪に見舞われる年もある。はっきり覚えているのが、11月23日の新嘗祭（今の勤労感謝の日）に、公会堂の中でみんなで遊んでいると、底冷えがすると思ったら雨に白いものが混じりはじめ道端の草が白くなってきた。根雪になるのは12月の半ばだが昔はいまより寒かったのだろう。

柴や薪を小屋に運び冬の備えができてくると、何となく心が落ち着いてくる。囲炉裏に火が入れられる頃になると、その周りのだんらんで心満たされた気持ちになる。このころに男手のあるうちは炭焼きにかかる。私の子供のころ、戦後で産業も少なかったのか出稼ぎに行く人は少なかった。炭山の都合によって、窯を新しく築く人もあるし、まだ前の炭窯の周りに木が残っている場合はその窯を使い続ける。ちょうど取り入れがすんだ頃から炭の需要期になる。

炭焼きは重労働だった。一回分の窯に入れる木を10日間くらいで準備しなければならない。今のようにチェーンソーなどないのだから、すべてのこぎりで切りそろえて山の斜面を運んでくる。炭を出す日は特に大仕事だ。1200度の高温で白熱している焼けた炭を掻き出し、へこんだところに落とし込んで灰交じりの土をかけ空気を遮断する。全部掻き出してしまうと、まだ熱い窯の奥から用意した木材を立てて詰めてゆく。

炭窯から出る煙の色や香りをかいで、どの程度炭化が進んでいるかを判断し、空気穴を増減し排煙孔を調節する。熟練の炭焼き名人に相談することもあれば、仲間同士であれこれ意見を交わしている時もある。炭を出すタイミングを調整するのだが、どうしても深夜に炭だしをせねばならないときは、徹夜する時もある。

炭俵はススキの軸で編んである。この刈初めの日は村で決めていて、一斉に茅場に入って刈取り、大きな束をいくつか縦に寄せ合って乾燥させてから家に運ぶ。祖父はこのススキで藁屋根の修繕を秋の末に行っていた。各地に今も残っているススキ野原は、この資源を確保してきた名残なのだ。

一つの俵が15キロくらいだったのだろうか。昔は4貫目だったのだろうか。時には山から運び出すのに、子供も手伝いに背負わされることもあった。大人の女性は2俵背負うし、主人は棒の両端に2俵ずつ付けて担ぐこともある。そして出荷の日は公会堂の広場にあふれるほど集積され、検査員が来て等級を決めてゆく。白炭で固いが、村の山にあまりウマベガシは無くてコナラやクヌギが多かった。

叔父は本格的な炭焼きはしなかったし、祖父はもちろん冬中藁仕事に追われていた。しかし家の山のそばで他の人が炭を焼いている時に、共同で炭を焼くことがあった。うちの山の木を切って一緒に焼き、できた炭のいくらかを貰って自家用に使う。叔父は囲炉裏の明かりを頼りに、鋸の目立てをしていた。その時できる鉄の粉を、薄い和紙に載せてこよりのように扨じり、それに火をつけて燃やすと線香花火のように光った。暗い冬の囲炉裏端のささやかな慰めであった。

村の背後に広がる県境まで山並みのあちこちで白や青の煙が上がっている。公会堂の広場に何人か集まって見ている。異常な煙が上がっているのは窯の甲が落ちたのだ。自分の窯ではない、村の人ではなさそうだが、よその村のものらしいと推量していた。しかし叔父の同級生が炭窯で亡くなった。寝転んでいて甲が落ちて焼け死んだために、ほとんど体は残ってはいなかったらしい。その奥で炭を焼いていた人が帰りに甲の横の窯の熱の伝わる場所に蓑を敷いて寝転んでいるのを見て声をかけたそうだが、甲の上に寝返ってしまったのだろうか。

このころ生徒一人に薪の束2つづつを、学校に持って行くことになっていた。割った竹で桶のタガのような輪を作り、30センチほどの薪を詰める。薪の隙間にさらに薪を叩き込むとしっかりした束ができる。家で使う薪は60センチくらいの長さのものを、そのままどや囲炉裏に挿し込んで燃やしていく。教室には鋳物のダルマストーブが備えられるが、それには短い薪しか入らない。

ストーブを自分で焚き付けた記憶はないので、用務員の人が付けてくれていたのだろうか。ただストーブ当番というのが二人ずつ順番に廻ってきて、杉の葉や燃えやすい柴などをひとくくりにして持って行った。小さな軽い束なので、私は自分で杉葉などを拾ってきて作った。それが翌日の焚き付けに使われた。このストーブがたかれるのは、雪が積もってくる12月半ばからだったのだろうか。いつから焚きだしたかの記憶がない。